

フランスから見る大震災後の「故郷」

湯沢 慎太郎

今から一年前、3月11日の東日本大震災の経験は、全ての日本人にとって真に「滅び」の経験でした。

東北の太平洋沿岸を数百キロにもわたって破壊尽くした津波は、二万人近くの方々の命を奪いました。亡くなった方々、家族を亡くし住む家を失った多くの方々、そして福島第一原発事故の放射能汚染により避難生活を強いられている何万人の方々のことを思い出します。

命の危険を冒して津波で破壊された町に救助に赴いた方々、原発事故に対処した方々を思い出します。どのような災害があっても、家族、友人を失っても、助け合いながら、思いやりながら人は生きていく。日本の人々が助け合う姿は、私たちに本当に希望を与えるものでした。

日本の原子力政策については、徹底的な議論が理性的にされることを望みます。ヒロシマ、ナガサキの悲惨の記憶は、なぜ日本に54基の原発が建設されることを妨げなかったのか？ しかも今、日本列島は地震活動期に入ったと考えられます。福島の子供たちの声を聞くならば、私たちは「悪」に立ち向かう責任があることが分かるはずです。歴史は繰り返されてはならないのです。

核エネルギーに象徴される科学技術と経済の力は、私たちに自分が「滅びるべきもの」であることを忘れさせます。それにより人間は自分の存在の「意味」を見失ってしまいます。ところがこの大震災はこれらの力が自然の猛威の前には全く無力であることを示したのです。

私の心に残ったのは、津波で根こそぎ流され、瓦礫となった町を前にして、手を合わせている年老いた女性の姿です。今、日本では、大きな悲しみを越えて、救いの歴史において、本当に尊いことが起こっているのだと、私は思います。

私は、全ての「意味」を根本から、日本文学の起源から、考え直すべきだと悟りました。

私が辿り着いたのは初期万葉にある挽歌の伝統でした。

君が行き 日長くなりぬ 山尋ね
迎へか行かむ 待ちにか待たむ

白川静は著書「初期万葉論」の中で、この「山尋ね」とは死者の魂を迎えに行く意味であり、この歌は挽歌であること、しかしそれは喪失感というような個人的契機を越えた呪的儀礼、「魂振り」であると説明しています。

「たまふり」とは、「ふる」、すなわち魂を密着させること、そして「ふゆ」、魂が増殖する意味を持つ。

したがってこの挽歌は生命の復活儀礼の意味を持っていることを説明しています。

魂と魂が触れ合うような、真実の関わりを人々が持つことが、日本人にとっての「命」、

生者と死者の境をこえた「命」なのです。

また初期万葉に多く現れる「見れど飽かぬ」という表現を、「国から見が欲し」という地霊の誘いに応え、山川が永遠に持続することを願い、永遠性をたたえる「魂振り」であると説明しています。国とは自然と人の魂の交流の上に成り立つのです。

この川の 絶ゆることなく
この山の いや高知らず
水激つ 瀧の都は 見れど飽かぬかも

人と人との出会い、人との人格的な関わりこそが「聖なるもの」の顕現の場であり、そこに全ての人の「故郷」があるのです。

「滅び」を見据えることによるのみ、「決して滅びないもの」が現れてきます。聖書の中で預言者イザヤは「偽りを避け所」とする支配者に対し、「全地に定められた滅び」を告げます（イザヤ28章）。押し寄せる災いの中で、私たちの唯一の揺るがない拠り所、究極の希望とは、人々の間におられるイエス・キリストなのです。

パリ 2012年2月20日

(パリ日本人カトリックセンター 信徒代表)